

放流してから約3ヶ月後の調査結果では、その放流場所によって著しい差があったが、約400個体の残存が確認された。残存率の最高は18.7%で最低は0.5%であり、平均約4.0%にとどまった。

大きさは放流時が平均 0.38 ± 0.09 cmであり、調査時では穿孔生息長径値で $0.65 \sim 1.60$ cm、平均 1.05 ± 0.2 cmであった。

安定した放流技術の開発に関しては、今後も試験放流を継続し、放流場所、放流サイズ、放流方法等の検討を加える必要がある。

6. ヒメジャコの種苗生産に関する試験

ヒメジャコの種苗生産に関しては、前年度とほぼ同様であるので、今年度の概要だけを述べる。

1981年7月14日に母貝を4個体(殻長 $9.18 \sim 10.99$ cm)を使用して、切り出し—アンモニア処理法で採卵した。得られたD状浮游仔貝は28万個体であった。飼育水槽は500ℓの透明ポリカーボネートタンクを3基使用し、餌料には *Dunaliella tertiolecta* と *Zooxanthella* (*Gymnodinium* sp.) を投与した。

前期幼生飼育では22.6万個体(80.4%)が初期沈着稚貝(初期殻頂期)となった。後期幼生飼育では受精後60日目で8.5万個体(30.2%)が生残した(種苗生産数)。

70~73日後の9月22~25日に稚貝を順次屋内から屋外の水槽に移し、流水飼育を行なった(中間育成)。中間育成開始時の稚貝数は6万個体であった。屋外飼育後約1ヶ月の10月23~26日(受精後101~104日目)では、その生残数は4.6万個体となった。これは飼育開始時のD状浮游仔貝数の16.4%であった。

その後の飼育環境は冬の低水温、曇天期となり、この間に生残率は昨年度と同様大巾に低下した。

中間育成は現在(1981年3月)も継続中であるが、この期間の生残率の低下を防ぐ対策を検討する必要がある。

7. カタメンキリンサイの生息状況調査

生息状況調査は3年目となるが、今年度は1981年3月23~25日に多良間島、8月5~7日に波照間島、そして8月25~27日に与那国島で調査を行なった。

波照間島の北海岸の岸寄りにわずかながらカタメンキリンサイが確認された。漁協の話では以前は採取もしていたようであるが、現在は漁場が衰退し採取できる状態ではない。

多良間島では、カタメンキリンサイは採集されなかったが同属の和名キリンサイ(*Eucheuma denticulata*)の生息が確認された。

与那国島では、北側2ヶ所と南側1ヶ所で調査を行なったが、キリンサイ属の海藻は発見されなかった。